

演劇改良論駁議

守川丑之助

074762-000-3

特47-596

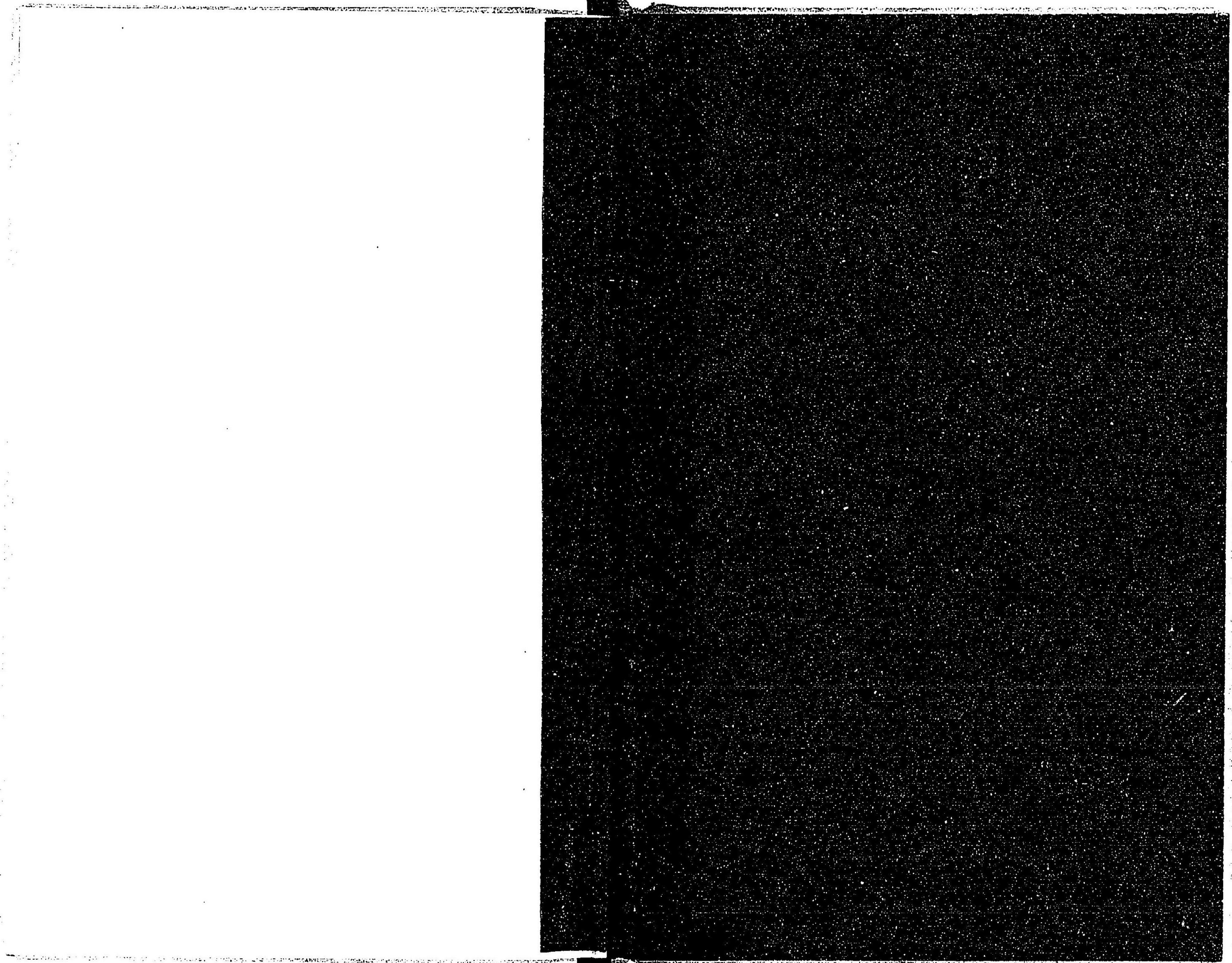
演劇改良論駁議

無一庵無二/著

M19

CEK-0060





ex 190

68

293

# 演劇改良論駁

無  
一  
庵  
無  
二  
書

の  
屋  
無  
聲  
序

發  
兌

今  
古  
堂

○改良論駁議序 明治十九年十二月六日 内務省送付 〇〇〇〇 貸教育會

無一庵居士は釋教の學士なり曾て泰西に航して哲學の門

を叩き歸て市井に隱る常に遊戯三昧して世道の事に關せ

然ども靜之時 能を通過して常に人心歸向の如何を洞察

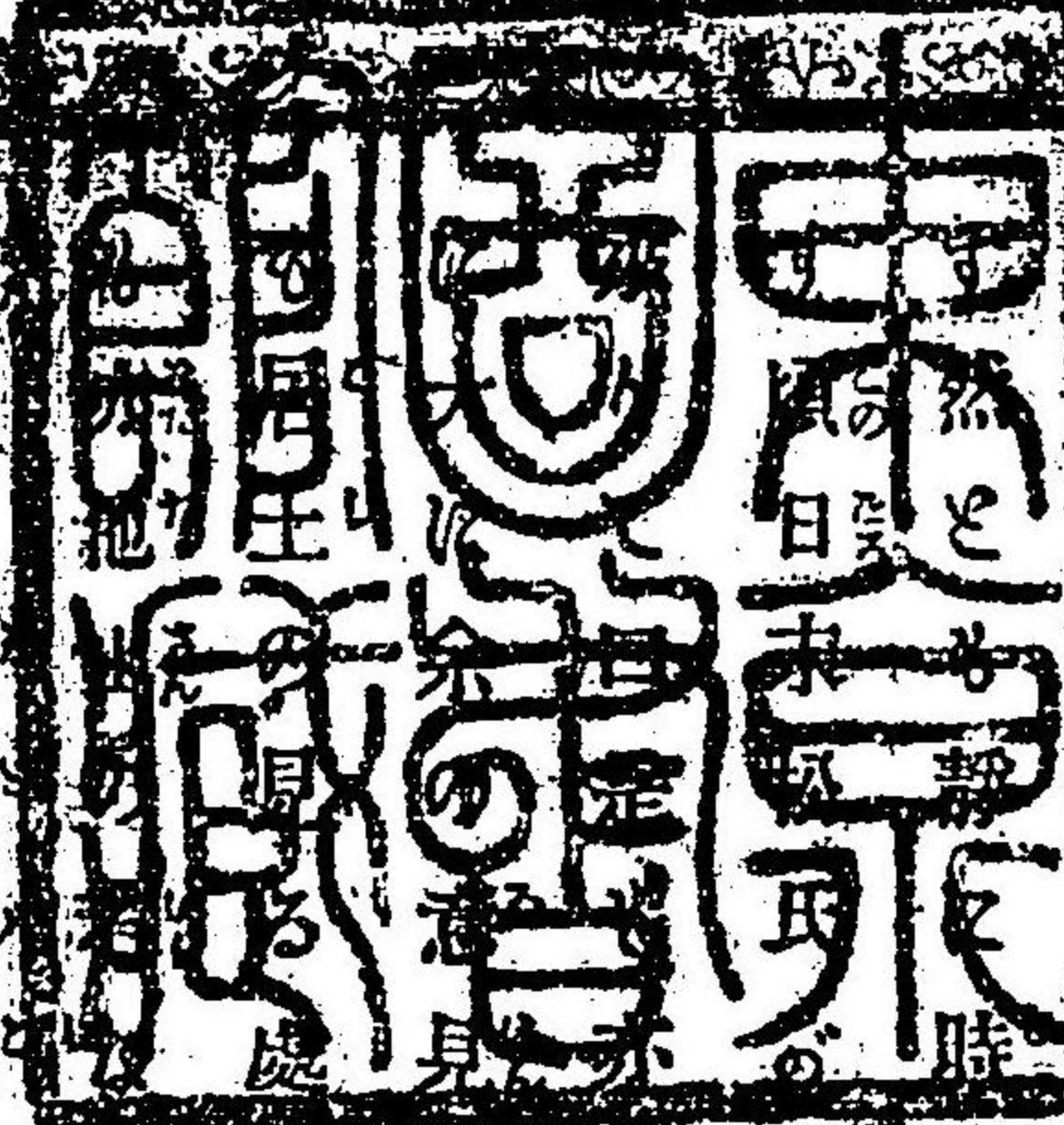
演劇改良の意見を駁論する一冊を袖にし

一遊戯なり子余が爲に序せよト余之を讀

と同一の意見と亦大に改良家の参考たる者もあるべし是

必らず江戸ッ兒の賛成すべきもの少なからざるをや余則

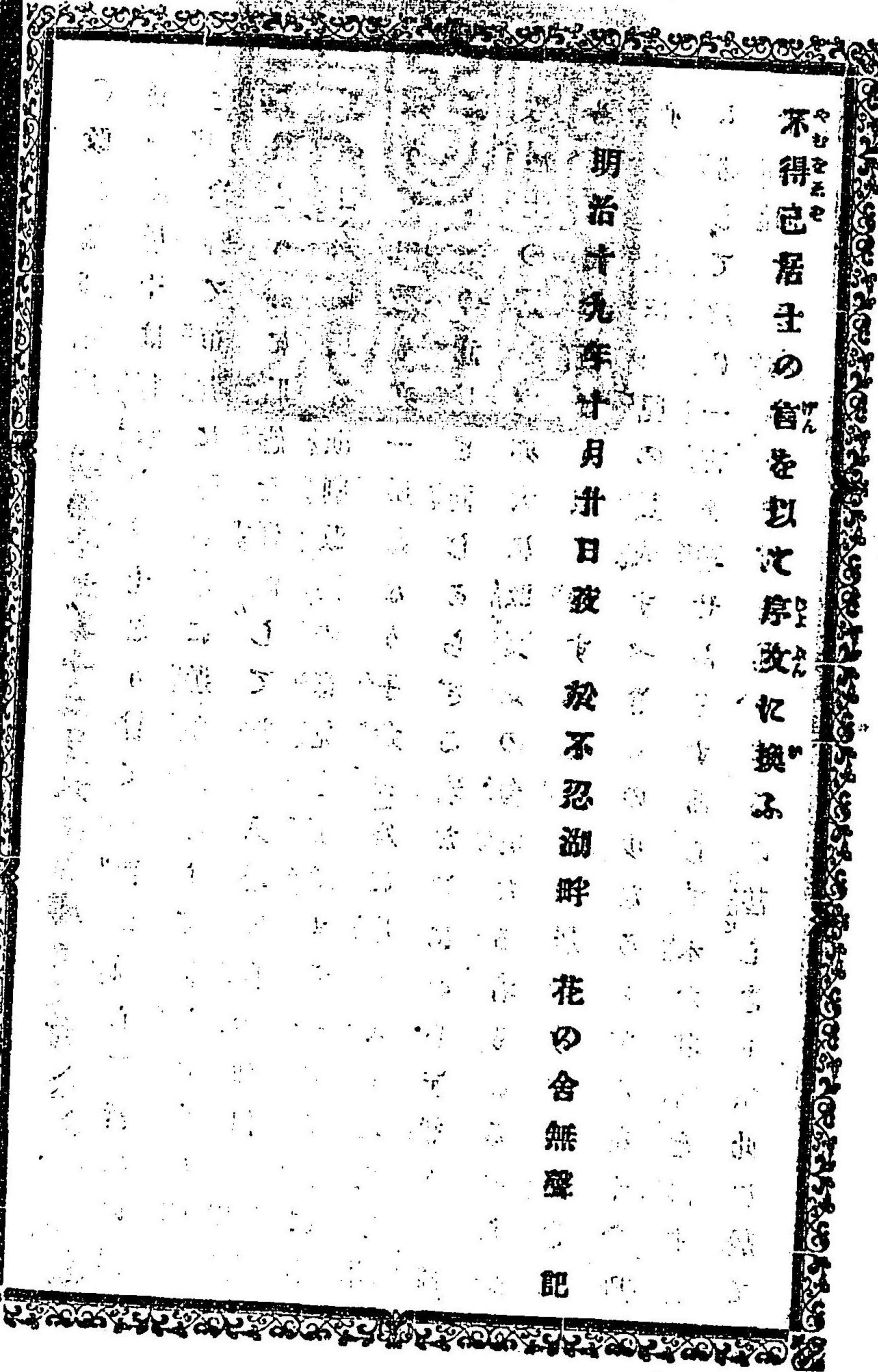
ち諾して將に一言を題せんとす而して未だ其料を得ず居



士日向を考ふるや何そ違ふ者の甚しきト余此に於て

不得已居士の旨を以て序改に換ふ

明治十九年十月廿日 夜す於不忍湖畔 花の舎無聲 記



○演劇改良論駁議

東京 無一庵無二 著



洲より歸りて演劇改良の儀を唱ふ朝野  
賛成して其言漸く世に信せられ改良の  
とす抑もく改良と云事は其の字面上  
あらざる惡き事をば良くすると云ふ世上  
惡き事あらば宜しく之を改めるがよき  
此事は良しと云ふも必竟は當に  
ならぬ事のみ多くして眞正に惡きやら又た惡らぬやら  
確とした事は譯らぬものあり例へば此酒はよき酒あり否  
も惡き酒ありと云争論起りたゞと假定し此酒の好惡を定

二  
もるべきに何を標準とすべきや上等社會の人は正宗の酒  
も美とは言ふ可らず田舎の人は田舎造りの地酒濁酒を雖  
ども悪しとはいえず此際酒のよきあしきを定むるには一  
種酒を目安として此酒より此酒は悪き此酒より此酒  
は美しと云の外あるべしされば改良と云事も悪き處を  
改むるその意味されば何所を悪きと云事を先づ定ねば  
らざる其の理を云は日本全國の人心を標準として吾國  
の大意の氣好は此の度におり然るは演劇の度は甚た下の  
方にて在りとも人氣に適合せぬ改めねばならぬと言ふの論  
ならんでは叶はぬ事なり然しながら未松氏は日本の人氣好  
尙の果して今の演劇より上にありや否やを測量せられし  
や否や総て悪きを改めて良くすると云事には不同意を鳴

すもの有可らずと雖も其悪きと認むる事未だ必ずしも悪  
あらざる其斯くせば良しと考ふるもの思ひの外人氣に適せ  
ぬ事あるやを恐るゝ而已余輩は日本の人智の度と好尙の  
有様とを察するに未だ改良論に左袒する事能はざる  
なり  
余輩曾て英國に在りも際にしては甚た歐風の演劇を愛慕  
し吾れ日本に歸らば日本演劇の体面を一變して其精神を  
歐洲の演劇に採り大に社會の風俗を優美にせむと思ひし  
事あり歸朝したる後つゞゞと考ふれば是も亦た謬見に  
て有しあり學問上の考よりすれば一日も早く改良するを  
是とす亦た有爲の才子の境界には一種の思想ありて何  
仕事をあさむとの各學心多きにより様々の工夫もするも

の亦其主夫する中には充分凡の氣の付ぬ事を擔ぎ出す  
 事もありて一時世士の耳目を驚かす事もあれど深く分別し  
 て見れば思ひの外口安らぬ事を仰山に騒立る如き事實あ  
 り此の改良論も其一種にして實は誰も此位の事考へざる  
 にもあらねと思慮ある者は能く利害を計算するが故に言  
 出さざるのみ只た笑止なるは末松氏にかだてられて驗を  
 立る紳士及び俳優もあらん又た無學作者と言れてやツキ  
 となる作者方もあらん何も優勝劣敗の世界なれば致方は  
 なけれど余輩は一番末松氏に向て模範を入れざる事を  
 得ずるも亦其の如き事なれば其實は名譽  
 末松氏は歐洲の演劇熱に感染したる事なれば(其實は名譽  
 上の道其立かも知れず)日本の芝居を見る毎に痛に障る事

多ある可ければ其は末松氏の痛の虫の智識の度にもよる  
 事なり氏も福地氏の机下に在りて新聞原稿の添削を請た  
 る頃を反省せよ當時の氏の痛の虫は日本の芝居に不同意  
 を鳴さざりし事ならん三四年歐洲に在りて氏の痛の虫は  
 甚た伶俐になりたるが故に今日は日本の演劇を惡むと  
 するに至りもなれば此の改良は氏の如き智識ある人にし  
 て初て希望する者なり故に氏が智識と其度を同ふする福  
 地氏。福澤氏。中川上氏。末廣氏。藤田氏等は忽ち賛成したる事  
 ならん然らば今日の改良論は何事も改良しと騒立る連  
 中の議論にして其實は末松氏のため叩き付られしやも  
 知れ老任他中等以上興論なりとするも其中等以上のみ  
 者達なれば今少くも各案有さるなるのなが余輩は今

日法にて改良す可からずと言ははあらねき是は改良する  
 ものあり此は悪き事ありと言ふも其事を却て今日の人智  
 によき事ありやも知る可からず(第一)今の改良論は上等社會  
 の欲する處とするからば上等社會專有の演劇を造らんと  
 の考案あるべしとすれば日本小部分の人の爲にするもの  
 あれば今日に於ては必用あらざ(第二)改良と云ふも末  
 松氏が自分の好きな事をかゝべて其通りにせんとするもの  
 あれば必竟改造と云ふべきものにして改良にはあらず其惡  
 き處必らず惡あらざれば(第三)西洋演劇は西洋數百年  
 の風俗人情より自然と淘汰而來なれば日本に移さん  
 とするも其人情嗜好の境界に適す可からず(第四)と云ふあり  
 其他下足の事や茶室の飾りや杯云事はどうせもま

きあり

さて余輩は末松氏が文學會に於て述たる改良上の意見あ  
 るものを見るに流石に才子だけありて能く述べられたり氏  
 の才學と氏の履歴とを以て今日に此論を吐るゝ事あれば  
 誰も雷同附和するや疑ひあし而して其論説も甚た緻密に  
 して無學文盲の劇場家は固より一言も否な内々には怨め  
 しくも思ふ事あらん余輩は實は抱腹に耐ざる事あるが大  
 体上否か前に述べたる論點に於て氏と反對の位地を有す事  
 なければ左に不同意の點數條を陳述すべし  
 改良家は廿万圓近く(十五万圓)を以て劇場を練化石造に建  
 築するとの考案なりとの意を述べられしが其說の中に廿三  
 年が來たらどうする三四十万圓の金額何の譯もなければ



立派なのを立るがよいとの説もあれどまさる三四十万圓掛て建築する程必用でも有まい故に二十万圓以下十五万圓位でよじ其場所は研究中なりとあり三十万圓も掛る程必要でなきものゝ十五万圓ならば必要を感ずと云も變な話なり十五万圓の差にて必要と不必要との別あるも然らば此の改良論は何程位の金で出来るならば必要なりや改良論にして何程より超過せば必要ならざるか此邊の處疑ひなきにあらざ総して今日の日本では十五万圓で芝居を造る身代にあらす少々考て見られよ一枚三錢の新聞すら高過るとて買人少くなり馬鹿氣たる直下をなしたるにあらすや此一事にても貧乏身代は知れた事なり若し目下改良の必要を求めなば又々いくらもあり十五万圓の大金猶

遣ひ道あらん寧ろ十五万圓で府下小公園の十五ヶ處も拵へた方有益ならん今の新富坐決して不適當(日本の身代)にあらず寧ろ立派なりと言も可ならん演劇場の地面に公園地如きものを附屬するの説は或は無用あらんどの事あるが是は眞に無用あり末松氏の言の如く別に異見はあし幕間の長きを改めて短くせんとする一事の如き是は余り長くても困る可れども又た短くてもいけぬ事ありあんなば芝居に行たりとて初めあら延續けに觀て居らる可き者にあらす例へは今觀た狂言の事につきて前後を想像し又は其所作を品評するかと随分與ある事あらん吾國の演劇にても幕間に役者の巧拙を評し合或は道具立につきて品評するかと誰もする事あれば幕間は長し

とて左迄の害もあし其も一時間も幕間がありては困れども今日の演劇では幕間とても三十分位に過ぎれば是とて別假改良を求むる程の事もあし少く注意して貰ふ位にて宜敷事あらん

改良の演劇にては定て茶屋を無用の者とあす事あらん末松氏も茶屋は入らぬと云口氣あるが是も亦無益の世話あり今日の芝居につきて茶屋は何程の害があるべきや下足の世話やら車夫の休息所やら何やかやにつきて茶屋は大に便宜あるものと考へらるゝ事あり末松氏も言るゝ通り福澤氏と福地氏が下足はどうかすると言れしは流石に兩先生の老經營くべし杯といわれたれど何も其様に驚かるゝにも及ぶまじ必竟するゝ下等の人種が下駄足駄にて出

け出るにも這入にも混雜する也へ其始末に困る事ならん是も致方なし西洋造りの演劇場が出来たら日本人は物体下駄をやたて靴を穿くべしと云布告を出して貰ふ譯にも參るまじければ是は茶屋を癩す事をやめて茶屋附の容は下足を茶屋が始末をなし茶屋に付ぬ客は土間なり高土間なり其處へ一ツ宛の簡便なる下駄箱を附て置もよあらん下足の心配も入らぬ事なり兩先生の御配慮を煩すにも及ぬ事なり其にしては茶屋を癩さぬが却て便宜なり斯いせば西洋の演劇には茶屋はないと言ふれども西洋の演劇は未だ不完全にして茶屋など云便宜な方法も未だ出来ぬ事なるべければ折角に在る處の便宜法を癩すにも及ばず且つや茶屋とても一個の營業なり西洋には芝居茶屋は

ないとして之を癡す事は出来ぬ事なり茶屋にも營業の權利あり内幕に壓制を用ひて止めさせぬ以上は正當なる理由では癡し兼ねるかと思はるゝなり

演劇は夜がよいとの御論至極尤なり然し夜でも晝でもどちらでもよけれど是は強ち夜芝居と許り極る譯にもぬぬ事ならん然し日本現今の演劇は朝あら初めて夜に入る事なれば是は馬鹿くしい事なり責て午後よりとして晝芝居は六時に仕舞がよし夜芝居は六時より十一時迄迄宜しあらん明を引く窓の事や音聲のたれに窓を直す事は御尤至極の事あり

サテ花道の事に付きお小言が有たるが是は御再考あさるが宜しあらん花道は西洋にはあいら日本では入らぬと

言ふ事からば致方あけれど若し改良と云目的よりして花道は入らぬと言は其議論未だ當を得ざる事あり日本人の耳目に適する演劇をあすには日本の事實を以て日本の衣裳日本の景色日本の道具とする事あれば昔より見慣れたる花道はあくて叶ぬ事あるべし若し仙台萩や一の谷の如き芝居はせぬがよいと言は丸てぶち毀しの論にて改良とはいえず若し古き狂言もするあらば熊谷の敦盛を呼返す事もするあらん仁木の花道の所作もする事あらん然るに熊谷の舞臺の上で大音あげて傍に居る敦盛を呼返しては不都合は有まじきや又た敦盛を見せて直と引込せ其上で熊谷を出す積りあ仁木とてお鐵之助の舞臺の上に居て所作ありし機會花道へ現るゝので面白き観物ともあるあり

名古屋。不破の鞆當の所作も其通りあつたらぬ事はやめるト言は江戸ッ兒は不承知を言ふ止ぬ事あらば花道は入用あり何に付蚊につけ花道は必用あり此花道は必要かと言は然らずあつてもよしと言れたれど決して然らず華山の女房が墓参り許りに花道を用ゆるにはあらず再考し玉ふがよし

改良の考案中道具立の論ありて美術上に基きたる仕組にするがよし景色は油絵となし其他すべて實物と見ゆる様にせよとの考らしく聞ゆる事なるが此に美術と云時は強ちに功効ある技術に而已依頼す可らざるものあるべし例へば鳥井流の看板も實は美術の一にして美術保存とも言ふべきなれども功効なる真景を欲するに至ては鳥井流は

のつべらとして一向に興を寫さず真の樹木を舞臺一面に植付られは殺風景なりとの考まとして見れば余り西洋風も殺風景に陥る事なきにはあらざるべし此邊の儼はよく注意なしては時ふまじ是は殺風景だ是は美術た是は真景だ是は妙な是はいけなひト自分で許り極られても一般の見物は迷惑する事ぬるべし

日本従來の演劇は總て勸善懲惡と云四個の文字を基礎とし不此に因果人情勇烈忠孝信仰などを加へて一種の脚色となせし事なるが其の目的は後年はメチャクチャなり成り首尾を講らぬ狂言を作つたは有り識者に笑はる事となりし事なるが今度はその方向を改めて勸善懲惡など云事は宗旨違ひなれば美術と云澹泊な看板

は改派高尙と云ふ優美なる閑雅と云ふ体面を粧ふ事と云ふ  
 ん御目論見至極結構いゝはも賛成されど是は中々急に出  
 来る任事にあらず第一に俳優と云緊要ある器械が悉く野  
 卑な人物にして閑雅優美な色云立派な心を持たるものは  
 一人もあらず中に少しも氣の付れた俳優が有ると思ひば是  
 とてもだめな事が多い舞臺の上でくだらぬ面を書くとあ  
 詰らぬ骨業を揉くり廻すと云々高尙あつてもりて古寺  
 の什物を模倣して衣冠を存へる位の事斯くて簡方てどう  
 して優美と云高尙と云思想が有ふ等はあゝ其も是れも  
 日本俳優は小學科を卒業する程の文學もあらず只た後家  
 や娘の人望を得んとする位の希望を有し希くは貴顯のお  
 坐敷でカッポレの一ツも躍り貴夫人方にお花でも頂きた

いと思ふ位の見識に過ず是に附属した狂言作者とても恐  
 らくは米國史一冊満足に讀る者はあらず歐文は鬼も角  
 も日本外史が満足に讀る程の學力はあるまじと考へらる  
 師匠の跡について見聞えた事を其所の淨増理かしこの小  
 説もとより引摺あんで一本の臺帳を推へる輩あれば俳優  
 の奴隷たるは言ふ迄もあらず飯を喰て居るが不思議と言ふ  
 べしあんな境界な人物より成立たる演劇に向て閑雅の優  
 美のと注文するも途法もあらず了簡進といふべし「任他また  
 賞を掛て臺帳を暮ると云先生が推へるといふ言た處が其  
 に應ずる俳優の心が閑雅ならざれば到底閑雅な事は出来  
 ず優美と云閑雅と云いふは有形の物には多くなくして無  
 形に囑するものなれば閑雅優美は形は望む可らぬと云

望むべきものなりと評は此程望むべき小田原評  
 雷分出来ない相談ありし者も今十五六年をたが排優の若  
 年が洋行もしたり規則達を學問もしたり少くも新思想  
 を有し其心懸め高尚なるに至らば既其家の説も行はるゝ  
 ならん序に吾々も既其家を左祖する一事あり其は演劇の  
 作の事なり今の作者は迎ふためである期んな連中の抑へ  
 た脚色は學問ある者は見るを欲せず下等社會を以樂ま  
 るがは知らぬを風俗には害を醸す事ならん故に懸賞にて  
 求めらるゝも甚だよし又は版權を興ふなどもよし兎に角  
 は今の作者がいはない云ふ一事は大賛成なり然し高尚  
 優美と号し今の人情ありと云ふと飛上た脚身を立  
 ちたても因る話あり

さて高尙閑雅とは八犬傳の濱路の様な女を云梅川の様な  
 のは反對ありと言れ又た歴更の詩りて鎧武者に評り出  
 られでは困るとの御説あり此一事は少く申さねばあらず  
 八犬傳の濱路は信乃との約束を以て宮内を嫌み養父  
 言ふ事を聞ずして首をくゞらんとした女あるも成程其の  
 操は他の深弁あるものに比して感心されど之を高尙閑雅  
 と言て賞るときは女は此場合は首も纏るがよきとの意  
 を寓するあり之を梅川に比すれば上品おれと源氏の紫の  
 上にくらべては寧ろ紫の方高尙閑雅あらん吾々は女が情  
 のために首をくゞる者は甚だよろじぬらぬ事と思ふが  
 り其も先づ濱路位と言え迄の事も八犬傳の人品の上き處  
 をいふまでにて彼が舉動を其まゝに用ひたまはらざらば

言ば其迄の事其邊からば誰も異存はとざるまい次に歴史物と世話物との事あるが此事は古人の作者も余程注意ありし事にて今更申す迄もあけれど古き脚本にて鑑武者のみ出る事は一の谷を除きて余り見受ぬ事あり有名ある忠臣蔵が先づ演劇の中庸を得たものゝ由大序には鎌倉八幡の堂々たる儀式を見せ其中頃には世話物道行あど程よくあしらへ大切に大立廻りと来て先づ配済よろしき方あり方今の演劇も近頃は時代物は少く世話物が多し是は自然の人氣にて此に至りしあれば申分はあし別假に歴史と世話物とをどふするの何のとは入らぬ心配あらん脚本の事につき日本は余り長たらしくて妙が少あいと言れど自分でやッて見れば中々岡目で見える様には参るまじ

近頃の名人たどあ上手たどあ流俗で騒立る箕水氏の如きも漸く四五年此方狂言らしむ狂言を作る様にあつた事をれを其も高年に成てやッて今位の腕前にはありしあり馬琴の文才ですら狂言の作と義太夫の作には筆を投た程あれば中々容易事にはあくまじ終じて臺帳で見てつまらぬ狂言も實際では面白きものあり狂言でヤンヤト來たのも臺帳では見られぬものあり十字の辻占は臺帳では面白いが實際はつまらぬ狂言あり鎌倉三代記も同様あり浄瑠璃の方面白し實際にはある事も有れば岡目で許り評しても味くは参りますまい況んや支那の小説位讀だ腕前の老先生覺束あき事あり脚本についての注文は語り無用の事をらんと思ひを改良

家脚本の首尾貫徹を欲し主眼の立物を定めたりと望れど  
 或は是も一應尤至極あれども吾國の狂言脚本には大概主眼  
 の建物はある様あり然しあるも狂言は一人の立物を置  
 たるものあり一幕毎に主眼の立物あるも必ずしも能く吟味して  
 見れば多くは立物ありされども今度の華山長英の狂言の  
 如きは余り各作でもあく實は出心ものおよぎ故に大當り  
 を取られど脚本は甚だ不感心の演劇ありし今の作者の事  
 へ立物の一事にはお氣が付けぬおは知らぬと例へ立物  
 なきとて左程筋が譯らぬと云ふもあし殊に歴史を本と  
 して作りし脚本にては改良家の望み通りに參らぬ事あ  
 らん例へは小楠公を始終の立物とて作るに小楠公四  
 條親手にて討死せられし後は立物は立消を其れ此處にて

大團圓とあさば兎も角も其後の事を脚色事はあり難し其  
 他忠臣蔵も若し一人の立物を置ねば不都合ありとせば誰  
 を立物とあすべきや何れ作り直さねば不都合あらん例へ  
 作り直したりとも由良助を立物とあすの外あるべし然  
 らば由良助を大序へ一すでも出さねばあらぬ譯をもあら  
 ん何にせよ一人の立物を主眼と定めるは主極よけれども  
 鄭義あ事と思はる文章の如くは參らぬ場合あるべし  
 改良家曰く我が改良の老居は何を目的とあすや此改良演  
 劇は中等社會以上の人を以て目的とあすあり左れど中等  
 以上の人に許り分り下等社會の人物に分らぬかと云へば  
 決して左様ある次第にあらず矢張下等社會又相分る様よ  
 つとめねばあるまじ左りあがら一般に通すると云ふて下



等社會の人にも是非來て呉れど云ふは干渉すべきは氣の毒のはあし故に其の作者たるものは先づ中等以上を目的として作るべきあり下ありたる様はれをいふにも演劇の脚本の巧拙所作の優美閑雅を云事は下等社會には分るまじきんぞ妙作でも分らぬ人物には分らぬに相違ありれをも日本の芝居は中等以下下等社會をあてはめて開場せし事にて中等社會以上は從來多く芝居は見ずして能樂と可能狂言とありて事演たるは多し今や此目的を一變して中等以上の見物を主として脚色且之を演するに至らば芝居世界は一變して演劇は市等人民には分らぬものだ

場合とある事あるべし例は改良家の考へては演劇の場

とある不破名古屋の箱當と云事は嫌みの体おれど日本の見物多くは下等社會は此が大好物にて口を利ぬ作爲を大層に賛美風あれば改良家の見識とは大に其趣を異にするものあり所で改良家は學識も身分もある中等以上を専らとして優美と閑雅とあてやらぬとある事おれば見物の多數ある下等人民は必ず不平を鳴さるを得ず然れども此下等社會を驅逐し閑雅優美の境に入らば事は十年二十年の後に期すは事にもあらざ近頃或俳優の藝道の熱心を去り積がや古物樂器をまじり深た或る紳士(新聞屋)が作者に種を授けて然ておる斯でもおれど無性に疑た脚本を作らせたり事あり其ときば必定せざる來るおちんと紳士や俳優は居たり居たり事あらぬを實際演劇は

至ては一向の不入不評判にて其に反して或る無識の俳優の昔流の狂言を以て同時に開場した演劇は非常ある大入大評判をとりし事あり府下の人民百万の中上等は一方に満ず百分の一中等は三分の一にも足らぬ割合あるべし下等は甚た多きのみあらず芝居を好むも下等社会あり又た例へば伊太利國チャリキの曲馬を見る人種を一覽すべし三四千人もある見物の中中等上等は百人にも満ず皆あて等の人あり錢の安き故に下等の席を求むるもある可れと総じて下等社会の多數の輿論によつて好評も悪評も出る事あり斯く論じて見れば演劇は下等社会にのみ向て脚本を立るるよいと云ふ様あれと強は然るにあらず只た普通の目的を以て作るるよいと云事あり普通の目的とは中

等下等の社会を以てして中等上等を以てはせぬよいと申事あり上等も下等も人情に二分はあらず昔の上等は門地社会あれと今の上等は多く有識、金權、政權の社会を云ふ皆あ酢も甘いも承知の御連中あれば下等人民の意志に適するものを淺學卑陋取るは是ら兼て別付らるる程にもあるまじ故に中等以上を目的に也又作らるるは不賛成あり中等以下を主として作りたきものと思はる「斯く申さる底には底があつてさうしても中等以上であくではあらずぬとあちは實は改良の目的とは言ふ可らず寧ろ上等演劇場と云芝居を別に拵つて此劇場は官吏(勅奏官)華族等の外紳士(自稱に限る)にあらざれば入る可らずとあ株主にあらざれば見物を許さずとああんとあ覺あすの外ある可ら

ず是も亦文明社會の一奇事として賛成する人も多らん  
 と思はる。次に敗真家は曰くさて俳優は如何に或るべきや世間にて飛  
 んでもあき考へ違ひを爲すものありて敗真演劇の俳優は  
 巴里か倫敦かでも雇ひ來らねばあはぬ様に玉ふもあれど  
 矢張り日本在來の俳優より仕方があし。否も澤山か逸兎角日  
 本の俳優をばいけぬと云ふて世間の人の内よの甚だ之れ  
 を罵詈するものあれど之れ甚だ過酷なり日本俳優必ら  
 ぶあるか只今惜むべき其の流義は随分感服す。或る處  
 善事の智慧と愚事の智慧と均しと是れ智慧あれども用ひ  
 方が違へる故も後是の議論の中出るなり此流義の間違ひ素

まり廻りよ引直さずて新ならず。其の流義を云ふもものを早申せば第一に日本の俳優の  
 演ずるものはその精神よか。寧ろ變な手振身振り勝に居  
 り詞の遣ふ様もあまり人造ま過るなり。予の先達で仙臺に  
 て先代萩の政岡愁嘆場を演ぜしを見しとき政岡は義大夫  
 に詞を言はせ自分は頻りに手踊其半分の所作をなせるも  
 多あれどはむけな。人間か愁嘆するにあらぬに踊るもの  
 歎と云ひしに傍の某入田の處は市川團十郎が演せし  
 時左程身振はせざりしと云ひしに成る程團十郎の技  
 量を以てせば左等もあらず。なれが此等は劣勢に素養ある  
 ものか。或るは能はざる。日本普通の役者に手振身  
 振の加信を強ふ云はば迎も見るべき。新作は出來ざるべし

討ては此等急ぎには及ばず自然の進歩を待て可なり勿  
 論見物に於ては漸次に精神上よりする働を賞美する事に  
 ならば自ら其の進歩を助くるなるべし勿論改良會員など  
 は平生必懸念す一時の大變革を謀るにあらず是れ等か  
 即ち提灯もちの所以にてあるなりさて精神上よりする働  
 ちきを申なる次第を述べん日本の役者は兎角に自分か演  
 する境界如何を篤と味ひ心得ず無我夢中其形ちの上の  
 みよ奔る事多きは是の大なる誤りなり精神か入らねば其  
 の感の興よ看者よ移らぬの申す迄もなし西洋俳優の所作  
 を聞き見るに其悲しい場合よ至れり日本の役者の如くま  
 といひと聲をば立てずして眞に涙を滴らすことあり左り  
 とて眼よ水盞を含んで演ずる次第に非ず其身其場よあ

らば斯くも悲しき者あらんどの精神より演ずれば自然よ  
 涙も出るありといへり云々右の一段は改良論中の主要と  
 も言ふべき論点なれば余も熟讀玩味して其の利害得失を  
 案ずるにいかに御尤ある御論あり併しあがら日本の俳  
 優は概して無識にして心思卑屈あるが故に高尙閑雅と云  
 御注文の演劇にも極めて不適當と知らざる可らず流義の違  
 て居ると言るゝは流義の違て居るにあらずして九て目的  
 の相違して居る事あり抑も日本の狂言は能より出たるも  
 のにして其能狂言と云ものは心でするにあらずして体で  
 する狂言あり演劇も心でするものではあらずして演ずると  
 の習慣より來りし俳優あれば精神上の感覺を以て看物を  
 感動するかと云は期する處ではあらずあり後世上手の

俳優出て技藝も漸く進化し稍や心でする有様を現したれども欠張り普通は体を以てするの技ありと云事は知て居るものありさればあそ仙台萩の政岡が愁歎場で躍り廻り義太夫で其解譯を加へるかと云脚色あるものあらん團十郎が演じた時は斯ではあいと言も團十郎は技藝も進化し体で演ずる區域を離れて精神で演ずる境界に入りしあるべし將來十年とあ十五年とあ幾多の星霜を経る中に俳優にも高尚ある人物出きたりて精神を以て感動せしむる事をあさば改良家の説も實際に行はるべし左もあきときは迎もためである又た俳優をして自分演ずる狂言の境界を知らしめんと御考もありし事あるは是ぞ一層の困難にして中々以て容易の仕事にあらず例へば内府重盛の事

を演ずるに其身は大臣の職に在りて天子を輔佐し奉る責任ある者あれど父たる清盛が不臣の行ひある事あればどうも職權を以てする譯にもあらず子たる道を以て輔ん事も亦あらず忠孝二道の間在りて苦心する境界あんども言難き處あるべし見識あき者をして肉体で重盛を演せしめあば逆も眞實の演劇は出来まじ左りとして學問と技量と二ツあがら有さざれば此境界を精神で演ずる事は叶ふまじ何の事で何の爲にする事や一向に夢中あればあそ体で踊り廻る事あるべし総じて日本の俳優には自己の境界を知て演ずる者は一人もあるべし或俳優が古實、と騒ぎ立るも未だ境界自己の力あるにはあらず改良家の言に「一体日本の芝居は役者の人數が多すぎる其

だゝら役不足も言ふあるべし又た番附ばんづきの書やうに付ても  
 何や蚊かやと争あそふあり又幕數も多過て脚本しやくほんの書方にも彼是  
 と困難くわんなんをする様にあるあり云々とあり大体たいたいに於ては至極  
 御名論ごなろんあれどどうも困る事あり日本の見物は七幕も八幕  
 も見ねば事足らぬ心地こころすべし從來が一日に十幕つゝも見  
 て幕數が多ければ出があるとも安いもんだと云て數で  
 あなす風ふうなれば今優美で閑雅けんが赤上等ものを三幕見せて其  
 て打出うちだしと來た日には見物けんぶつ必らず大不平だふへいならん失張やり少  
 しも七幕と八幕とか演やぬばなるまじ幕數が多ければ役  
 者も多く入用いりようならん尤も改良の見込みこなきべい、役者を  
 廢いす事は致方いたしかたもあるまじけれど其も營業えいぎやうなれば減へすと云  
 譯にはゆくまじ又た番附の書やうは是れ名譽めいよの競争きさうと云

べき譯なれば是非せいひに及ばず席せきを争あそふは其争あそひ席せきにあらず  
 して權力けんりきに在りと云譯こたへもある事なり日本にては役者の位  
 附つ角力かくりきも亦同なは番附ばんづきにあり官員の如く辭令しじを渡される  
 でもないければ番附ばんづきで位地いぢを定むるに至りしも自然の勢せいひ  
 なり役者に於ても名譽めいよ上の觀念くわんもあり利益りやく上じやうに關する事  
 もあるべき此等の習慣しうくわんは悪き事とも思はれねば其改めて  
 害がいの在る点を除のぞくどあ何とあして保存ほぞんするも可べならんあ  
 んな舊習きうしゆは一洗いつせんすべしなど呵からるゝにほ及ぶまじと存せ  
 らる  
 さて次には一大問題だいたいどんたいとも言ふべき女役者の一條なり此は  
 一議論いつぎろんあるべき場合ばいばうと存せらる余も一工夫いつくふうせざる可べらず  
 先づ改良家の申まこととあるを聞きば

借て此れ迄申せしは現在の男役者のみの事なるが此より  
 一言せんとするは諸君は己も覺悟の事ある可れと世人よ  
 は或ひは喫驚するものも有らんか他かし女役者を入る事  
 かり真成の演劇は女役者は女役者をして演せしめずては到  
 庭出來ず去れば改良演劇は無論女役者を使用せんとする但  
 し女役者は何所みら取るものと問は此所は未發の件にして  
 少しく包むべき事あれば今日は洩し申さずとありき余は  
 女役者と男役者とを交むる事は大賛成にして一点の中分  
 かし余も洋劇を見しときも此一事許りは日本にても真似  
 をするの可あらんと思ひたる事あればいゝにも賛成致す  
 可し去りかゝら此女役者をとあるら引張て來らるゝか其  
 一事は甚た心配に存するのみ未松氏等の事あれば必らず

目覺しき事をあすあらんが何にせよ十七八あるら三十以下  
 の別品で少々は舞踏も知て居て歌もうたふべし聲も美と  
 云品物は余り見當らず見當らぬ處が十名も二十名もあるべ  
 き筈はあいに此に女役者の候補を求めは府下の坂東、中村、藤  
 間あそ云踊の師匠を撰擧して其師匠と弟子との中より人  
 撰するを第一手段とす次に藝妓より撰み出すの一事あ  
 るが右二手段の外は先づ有まじくと存せらる才子方の御  
 組立もへに別に奇々妙々の方法あるやも知れず余の想像  
 はみんあものにも過ず  
 此會をば私立會社と同心にするにあれば資金は株金とし  
 て募集し社長、理事、會計など置とすれば一寸聞は營業會社  
 なるべし營業會社ならば利益分配もせらるゝ事ならんが

大臣諸公も公然此の營業會社の株主となりて運動せらるゝ事なりや此事は未だ發せざる事實なれば申すはなけれども左様なる組織とあらば少々異見なきにもあらず且つ政府にて利益を保証せらるゝと云事も方今では如何のものか必らず地方の有志者など物議を起して騒立る事ならん文明社會の空氣を吸た人物はあり居る日本にあらず随分譯の分らぬ論客夥多なる國柄なれば少しは圓滑なる御手段なくば不可なるべしと思はるゝなり此邊の事甚た杞憂の至りなり

未段に社會改良の御意見につき政治上と社會上との一事を丁寧<sup>ていねい</sup>に御説明是は至極御尤千万いゝにも其通りにて日本國家のためにする事業は獨り政治上の事許りにあらず

社會にも將に爲すべき事澤山あり其澤山の事は是あらん中<sup>ちゆう</sup>く着手せねばなるまじ就ては演劇に許り其様に御熱心にて二十万圓の三十万圓のと云金を費し政府あらも保助を頼むの利益を保証して貰ふのと御騒ぎなさるは如何のもの乎少し御熱心すぎはせぬる將來爲すべき事業は澤山にて道路も築ねはあらず市區も築ねばあらず衣食住の事も改良せねばあらず身体も改良せねばあらず音楽も改良せねばあらずあんのかんのと仕事は山の如くある事あれば少し扣へ目にあさるゝがよきあり

右余が異見の大畧あり其事をあしゝとは申さねども改良すべき事柄をば誰が鑑定して悪しき芝居ありと定むるや改良家二三の私見を以て悪いの善いのと定めて好ま様に



敢あちねては一般の見物に不平あらんぞの大異見を基とし改良を必要とするに三十万圓と十五万圓とて必要不必要の區別が分るとはさふ云譯ありや日本の演劇は中等以下の人民が専ら樂む處あるに之を中等以上上等向に改められて迷惑至極あり芝居の作も中等以下を専らとして脚色たきものあるに中等以上を目的にせよとは是亦迷惑千方百计西洋にあきとて花道を廢すかと江戸ッ兒は必らず不平ある而已あらず第一に實際に差支が多あるべし役者をして休で演ずるをやえて精神で演せしめんとす其も行はれぬ事あるべしちと十條許りの小異見あり余輩も及ばずあちち社會改良の尻馬に乗らん事を期せし者あれども余は先づ芝居より初めんとは思はざりし何あら初めざるも

改良家の見込次第あれど物には自ら緩急と云ものあり順序あり無考へに掛られては少々閉口仕るなり若し今度改良會加盟の人々をして方向を轉じて衣食住改良の事に着手せられれば内部外部の改進を圖るに於て一大利益あるべしと思はる斯くいわばろんな事よりは樂む事を先にせねばならぬと言ふやも知れぬと樂む事はいつでも出来るマツ内地雜居につきても一般に外國語を知らねば困る次に衣服も此まゝでは居られず坐宅も今の体では外人と交際は出來ず食物も早く改めねば体育上にも攝生上にも大差支もあるべし何の蚊のど鼻の先に急務多し希くは此等の點に注意せられねば一般の幸福全國の利益害に一大美事なるべきに惜哉

附言有聊の卑見を吐て書肆の需に應ず余從來演劇道に於て學ぶ處なし末松氏の論出るに及びて某氏來りて駁議を需む余初て該論を一讀し乃ち筆を執て此論を草す忽卒の際固より思考を盡さず只た大方の笑を買ふに過ぎざる而已

○改良論駁議 畢

明治十九年十一月四日御届  
全 年十一月廿六日出版

(定價金十三錢)

東京府平民

編輯兼出版人

守川 丑之助

府下神田區五軒町

壹番地

日本橋區新泉町

今古堂 書房

神田區五軒町

郁文館 書房

發 兌 元

○府下賣捌所

神田區淡路町	嚴文堂本店
全 小川町	集 成 社
全 淡路町	團 善 書 房
日本橋區通三丁目	丸 善 書 房
全 通壹丁目	須原屋茂兵衛
全 傳馬町壹丁目	伊勢屋金次郎
全 通四丁目	叢 書 閣
全 通壹丁目	內 藤 加 我 閣
京橋區銀座五丁目	大 倉 彌 兵 衛
全 木挽町壹丁目	報 行 兵 衛 社
芝 區 神明前	萬 字 堂
京橋區南鍋町	山 中 市 兵 衛
日本橋區橫山町	天 狗 書 林 兔 屋
	鶴 聲 社

全 南傳馬町	青 陽 堂
全 本石町	日 月 堂
下谷區廣小路	木 村 巳 之 助
牛込區肴町	活 神 堂
四谷區傳馬町	伊 七 屋

此外府下各書林雜誌店繪草紙屋

○地方賣捌所

大坂府備後町	岡 島 書 舖
宮城縣仙臺大町	木 村 文 助
茨城縣水戸下市	林 斧 助
高知縣下高知町	開 成 社
京都府寺町下ル	駿 々 堂

此外地方各書林雜誌店

都文館新誌局賣捌書籍目錄

○人肉質入裁判

定價金五十錢  
特別價金十五錢

右ハ英國小説大家スエキスヒヤ先生ノ原著ヲ日本井上勸君直譯セラレ一杵齊芳宗氏密畫ヲ加ヘシ珍書ニシテ今古未曾有ノ小説ナリ其間才子アリ佳人アリ一讀卷ヲ措クヲ忘レシムルノ譯書也

○大日本大家詩文作家一覽

正價金十錢  
郵税金四錢

○繪入通俗漢楚軍談

和本製全部十冊  
壹圓八十錢

○英語尺牘例題 完

正價金三十錢

○少年姿

郵稅共全一冊  
賣代金二十錢

○語學獨案内

一ノ卷金二十  
七錢郵稅八錢

○東洋都文新誌

毎月二回發兌○壹部金  
壹錢五厘十部金十四錢

右ハ有名ナル諸大家ト謀リ發兌スル者ニシテ老儒名家ハ勿論青年才子麟兒鳳雛及小學生徒等ノ詩賦○文章(漢文)○藁瀋發談(末々口碑)ニ傳ハラザル忠臣孝子偉人節婦等ノ傳記等ノ數項ヲ掲載シ殊ニ詩文ニハ方今文壇ニ牛耳ヲ握ギル諸老先生ノ批評ヲ附シ編輯ノ精選ハ無論體裁ノ完美印刷ノ鮮明等ハ各方諸雜誌ノ遠ク及バサル所ニシテ既ニ諸先生ヨリ古今無比世界獨歩政談新聞中ニ時事新報アリ文學新誌中ニ東洋都文新誌アリトソ好辭ヲ辱フセリ若シ夫レ一讀ス焉恍トシテ詩園文林ニ遊ブガ如ク終日倦ムヲ知ラザ

ラシム荷シクモ世ノ文學ニ志スノ諸君汲此類才敏邁之君子ハ必ス一讀セザル可カラズ○壹錢形郵券三錢送付ノ上  
是本直ニ進送ス

○第十三号ハ來ル十二月十日發兌ス

### 東洋郁文新誌局

追伸做館新誌之儀近日ヨリ學說ニ關スル有名學士ノ論說  
及ヒ學術上規戒ヲ寓スル翻譯類同シク雜報等ヲ數欄ヲ設  
ケ學術上ノ件ハ總テ掲載シ江湖諸君子ヲノ毫モ遺憾ナカ  
ラシメントチ企圖致居候此段爲念廣告ス  
賣捌所 府下各書林雜誌繪草紙屋店地  
方書林雜誌店等有之候也

### ○東洋繪畫叢誌

唐本仕立美本白紙摺凡  
七十枚壹部金十二錢也

繪画ハ我神州美術ノ第一ニシテ歐洲各國ノ博覽會ニ於テ  
常ニ金銀牌等ノ名譽ヲ博スル者一ヨリ繪画ニアリ繪画  
ノ我國光ヲ輝耀セシムル者其幾多ナルヲ知ラズ而モ近時  
諸人之ヲ等閑ニ付シ一擲顧ミル所ナシ豈遺憾ノ至リナラ  
スヤ過般諸士意ヲ茲ニ注キ東洋繪画會ヲ設立シ北白川宮  
殿下ヲ推メ總裁トシ伊達宗城公ヲ副裁トシ野村素助公ヲ  
會長トシ益々此技ヲ振興セラル實ニ照代ノ美事ナリ而シテ  
テ傍ラ東洋繪画叢誌ヲ發兌シ以テ繪画ハ振興ヲ添フ每号  
貴顯諸公ノ書画及ヒ有名ナル大家ノ密畫題序ヲ交ヘ最モ  
繪画叢誌ノ名ニ背カスト云フ可キ一ノ良誌ナリ今般做館  
ニ於テ幸ヒ弘賣ノ榮ヲ得タリ江湖ノ諸君ヨ我國ノ美術ヲ  
ノ湮沒ニ歸スノ意ナクハ幸ニ購讀アラントチ切ニ希望ス

ル所ナリ

○第十六号 既發

菊亭靜先生閱 守川桃浴君著

◎落語改良論 全一冊 近刻

方今社會改良中ノ一手段タル落語改良ノ事ヲ詳論シタル  
モノニシテ落語ノ沿革ヨリ改良ノ要点方今落語家ノ内幕  
實況等ヲ推論シ其文章ハ活潑雄壯實ニ今日ニ無比ノ良  
書ナリ請フ愛讀ヲ玉ヘ

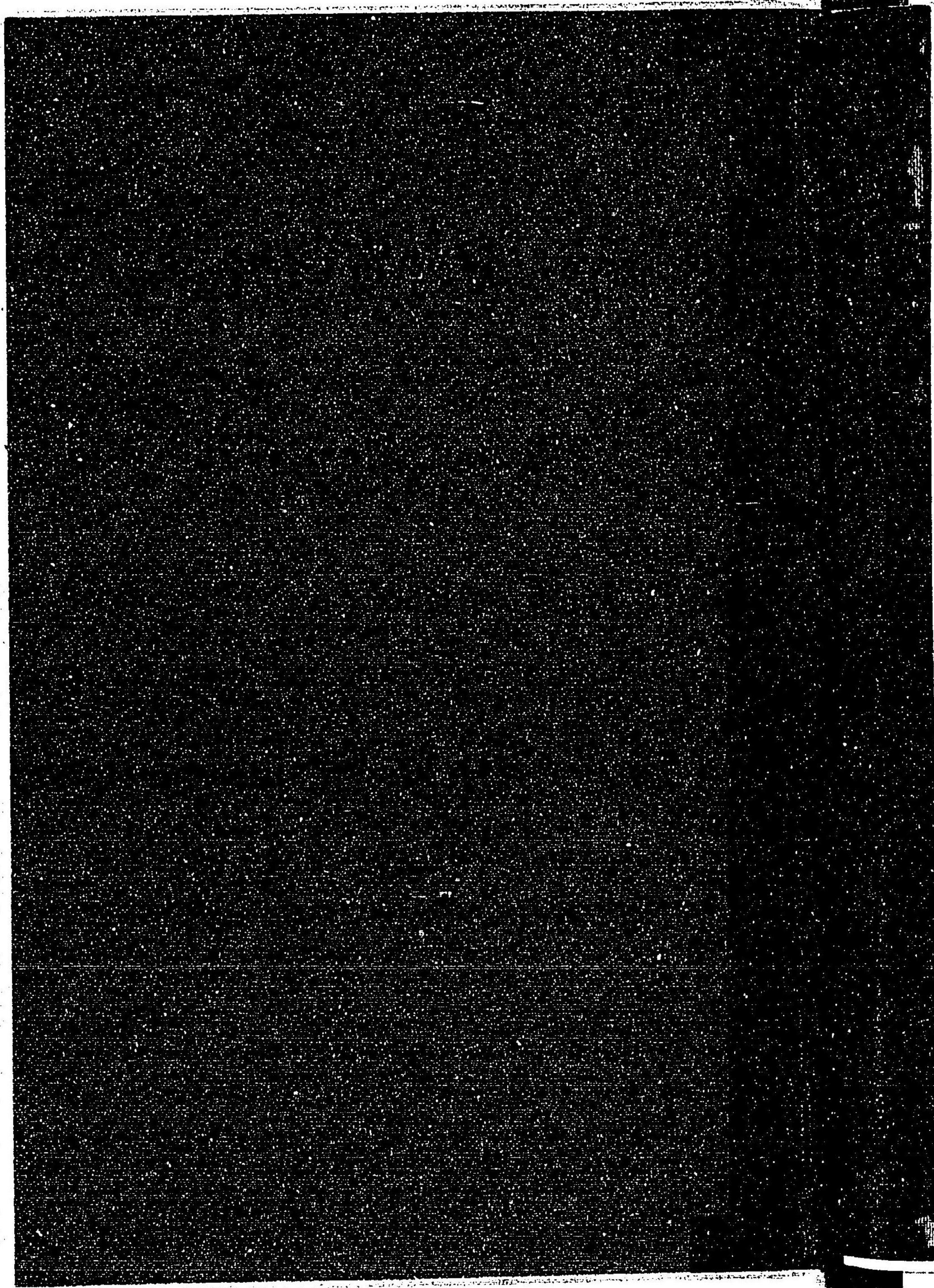
神田五軒町 郁文館新誌局

敝館ニ於テ賣捌セザル書籍ト雖モ各地方諸君ノ御辨利ヲ  
計リ無手數料ニテ何書籍ト雖モ取次差上可申故御遠慮ナ  
ク御沙汰有之度候也

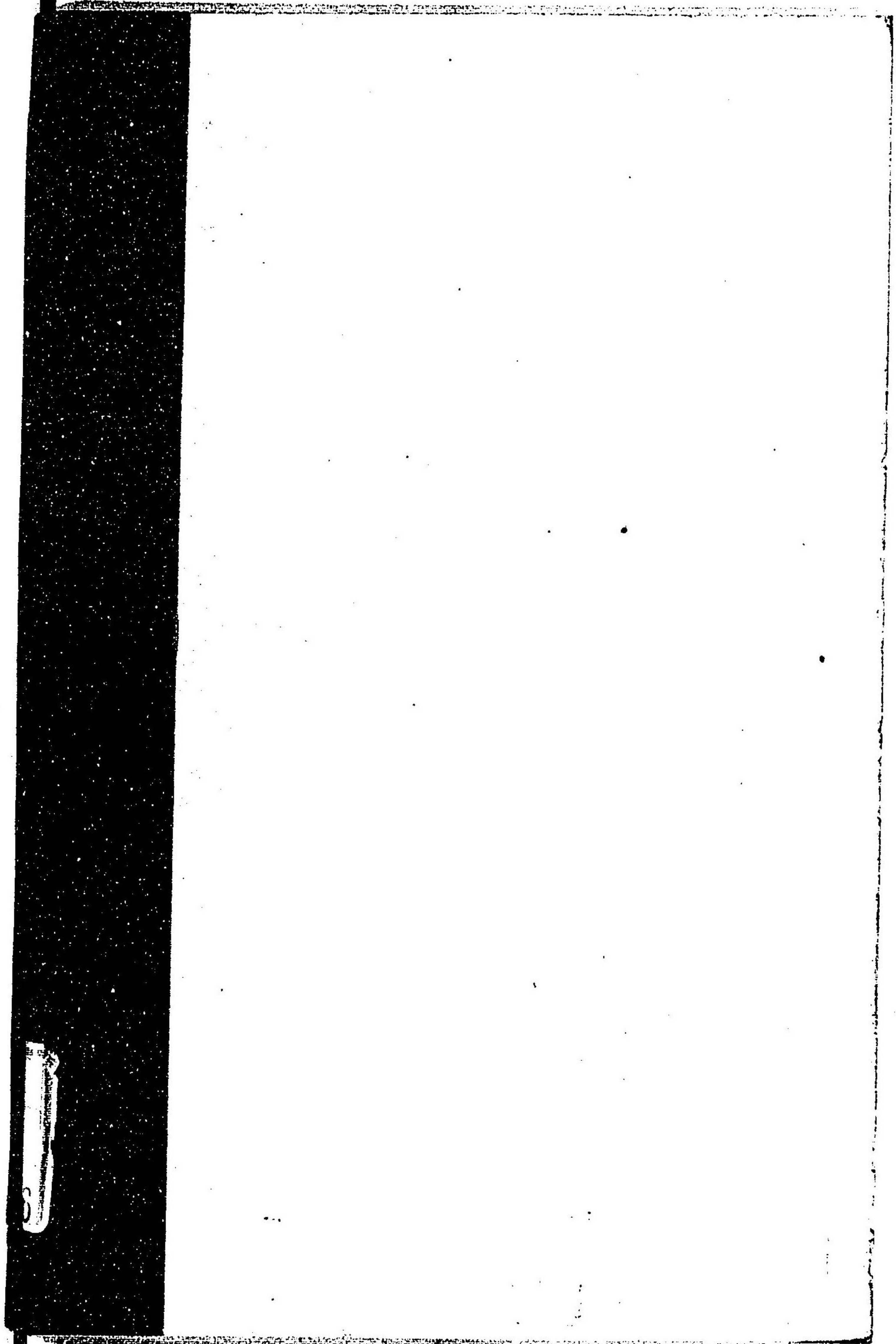
25  
/  
79

2x690

大日本教育書館			
一	一	一	一
册	〇	架	七
	號		函







5